



another eye

反発と共感の狭間で ～大統領暗殺 という手段を取ったフィルムメーカー

映画監督

ガブリエル・レンジさん

もし、ブッシュ大統領が暗殺されたら——。
まさか、と思う人もいるだろう。
そういうこともあるかもしれない、
とうなだれる人もいるだろう。
許されないことだ、
と憤慨する人もいるだろう。
人によって反応はさまざまと思われるが、
アメリカの現職の大統領が暗殺されたと聞くと、
平常心ではいられない。
ここに、そうした映画を撮った人がいる。
あくまでフィクションの中ではあるが、
現職の大統領が暗殺される場面を描き、
その後のアメリカを危惧する映画だ。
この衝撃的な映画を撮った
イギリス出身の監督に訊く、
アメリカ大統領という存在、
メディアのありかた、
そしてイギリスと日本の関係——。



ガブリエル Gabriel Range レンジさん

イギリス・チェスター生まれ。ブリストル大学医学部を卒業後、カーディフ大学大学院でジャーナリズムを専攻。イギリスのテレビ局でニュースやドキュメンタリーを作るようになり、『The Great DomeRobbery』『The Menendez Murders』『The Day Britain Stopped』『The Man Who Broke Britain』などのドラマやドキュメンタリーを監督する。本作『大統領暗殺』が初の劇場公開作となり、トロント国際映画祭(2006年)の国際批評家賞を受賞。「スクリーン・インターナショナル」誌では「2006年の明日のスター」として取り上げられた。

現職の大統領暗殺

反発覚悟で描きたかったこと

2001年。

アメリカ合衆国第43代大統領に就任。同年、同時多発テロ(9.11)の主犯オサマ・ビンラディン容疑者を匿っているとされたアフガニスタン・タリバン政権の拠点を空爆。

2003年。

大量破壊兵器の所有疑惑で、フセイン・イラク政権に最後通告をおこない、攻撃を開始。イラク戦争が始まり、フセイン政権は崩壊。

アメリカ兵の犠牲者が3500人を突破。反戦デモが国内外で盛り上がる。

2004年。

大統領選挙。再選を果たす。

2006年。

AP通信社がおこなった、アメリカ国民を対象にした調査(※1)において、「英雄」「憎まれ役」という項目で、それぞれ1位に選出。

その人の名は、ジョージ・W・ブッシュ。アメリカ合衆国第43代大統領。

2007年10月19日。シカゴ空港に降り立った大統領は、「反ブッシュ」を掲げるデモ隊を横目に、リムジンでシェラトン・ホテルに到着。この日はシカゴ経済クラブでの演説が予定されていた。大統領は、「今日は風が強い日だ」と軽快なジョークをとばしながら、演説を進め、つつがなく終了。ホテルの外で観客と握手を交わしながら、リムジンに乗り込もうとしたその時——2発の銃声が。

※1 アメリカ国民を対象にした調査

ちなみに、「憎まれ役」の2位以下にランキングされたのは、オサマ・ビンラディン、サダム・フセイン、マフムド・アフマディネジャド(イラン大統領)、金正日。「英雄」の2位以下は、イラク駐留アメリカ軍、バラク・オバマ(アフリカ系アメリカ人の上院議員)。

被弾した大統領は、病院に運ばれ、即座に大動脈手術を受ける。しかし、医師団の懸命な努力もかなわず、慌てて駆けつけた大統領夫人らに見守られながら死去。そのニュースは全米、そして全世界を震撼させる。

大統領暗殺。

安心してほしい。これは映画の中の出来事だ。実際のブッシュ大統領の映像と、新たにプロの俳優によって撮影された映像を巧みに合成し、あたかもニュースやドキュメンタリーのようなスタイルを取った劇映画である。

「ドキュメンタリー的な感覚を入れ込んだ作品にしたのは、観客がより作品世界に入り込めると思ったからです。いわゆるフィクションの映画において、大統領が暗殺される映画はたくさんあります。しかし、そうしたものは作り物として受け止められてしまい、観客は何も深く考えないで見終わってしまうのではないかという危惧がありました。それも、この映画をドキュメンタリーのスタイルでつくった理由のひとつです」

本作『大統領暗殺』を監督したガブリエル・レンジさんは、冷静にひとつひとつ言葉を選びながら、そう話し始めた。フィクションとはいえ、現職のアメリカ大統領を殺してしまう映画を公開することは、かなりリスクの高いことだと思われるが、やはり公開時には、かなりの反発があったという。

「全米公開の際には、非常に強い反発がありました。彼らアメリカ人にしてみたら、現職の大統領を暗殺する映画が公開される

大統領暗殺

Death of a President

監督・脚本・製作／ガブリエル・レンジ
脚本・製作／サイモン・フィンチ
出演／ジョージ・W・ブッシュ、ディック・チェイニー

10月6日よりシヤンテシネ他、
全国ロードショー中



公式サイト <http://www.20071019.jp/>



発言に代表されるような、非常に単純化、二極化した風潮にメディアが荷担したからだと思います。あるいは、ブッシュ政権がメディアを操作したという言い方もありますが]

映画では、警察とFBIが総力を挙げて、容疑者探しをおこなった結果、「反ブッシュ」デモ隊のリーダー、アラブ系アメリカ人、イラク戦争の復員兵などが捜査線上に浮かび上がる。そして特に、メディアによるアラブ系アメリカ人への誹謗中傷が激しく描かれる。

「人々の恐怖を煽り、アラブ系の人たちへの偏見を植えつけたのがブッシュ政権であり、アメリカのメディアだということを観客に知らしめるためにも、メディアの向いている方向が単純化してしまったことを指摘したかったのです。実際、アメリカはイラク戦争に突入してしまいました。その罪は決して軽いものではない」

テレビのニュースやドキュメンタリー番組の制作経験があるレンジ監督。アメリカにおけるジャーナリズムは変わってきたという実感があるようだ。

「私は、9.11の直後、しばらくニューヨークに住んでいましたが、その頃から、テレビやインターネットなどのメディアが24時間体制でニュースを報道するようになりました。24時間情報を流すことばかりに労力が使われてしまい、調査や検証というジャーナリズムにとって不可欠な作業ができなくなってきたようです。その影響で、メディアはイラク戦争を伝えきれなかったのではないのでしょうか。本来、ジャーナリスティックな使命があるはずなのに、残念なことです」

なんて、想像もつかないことだったようです。事実、『嫌悪感を覚える』とか、『この映画は病気である』などの非難を受けました。ただ、私にとって救いだったのは、そうした意見のほとんどは、まだこの映画を見ていない人の口から話されたことでした」

大統領が暗殺される場面は、映画が始まって30分ほどした時である。93分のこの映画は、大統領が暗殺されたあとの、犯人探しやメディアの混乱ぶりを描くことに比重が置かれており、大統領暗殺、というセンセーショナルな出来事を誇張したのではない。

「私自身、ブッシュ大統領個人に敵意はありません。ただ、ブッシュ政権がおこなってきたことに異議を唱えたかった。実際に見てくれたアメリカ人の反応は非常にポジティブなものでした。というのも、この映画を見た人たちは、それまで正しい、と思っていたことが実はそうではない、ということがわかったからだと思います」

9.11以降のアメリカ

ブッシュ政権とメディアの罪

正しいと思われていたものが、必ずしもそうではない。それはアメリカのメディアだという。

「9.11以降、アメリカのメディアは、テロリズムへの恐怖を煽ることに躍起になりました。9.11とサダム・フセインを無理矢理つなげようとしたり、アラブ系移民への偏見を助長したりしました。それは、ブッシュ大統領の『我々につか、それともテロリストにつか』という





イギリスと日本の類似性 イラク戦争に荷担した痛み

レンジ監督は、自分がイギリス人だからこの映画を撮ることができたという。

「もし私がアメリカ人の映画監督だったら、アメリカで資金を集めるのが大変だったと思います。イギリスで資金を集めることができたのは、イギリス自体がアメリカに荷担して、イラク戦争に参加してしまったことが大きな問題になっていたからでしょう」

この映画をつくったことで、アメリカ人を見る目が変わったと語る。

「私が感じたのは、アメリカでは大統領は非常にリスペクトされているということです。大統領を愛している人が多いからこそ、この映画への反感が大きいのもよくわかります。

※2 イラクに派兵したのも同じ

2003年、イギリスのトニー・ブレア首相（当時）は、アメリカのイラクへの武力介入を支持し、参戦する。日本も同年、イラク復興支援特別措置法により、陸上自衛隊を中心とする部隊をイラクに派遣した。

もし、私がトニー・ブレアが暗殺された映画を撮ったとしても、イギリス国民はここまで強いリアクションを示したかどうか疑問ですね。イギリス人の感覚としては、自国の首相に対してそこまでの信頼感はありません」

そう苦笑いするレンジ監督は、イギリスと日本の類似性について話し出した。

「イギリスと日本はよく似た国だと思います。ブッシュ政権に同意して、イラクに派兵したのも同じ（※2）です。そういう意味で、同じ痛みを共有しているのかもしれませんが。イギリス人にしろ日本人にしろ、アメリカの政府とメディアによって物事が単純化され、何が本当に正しいことなのかわからなくなってきている状況を認識してもらいたいと思います。

そのために私はこの映画を撮りましたし、メディアがどれだけ事実を歪曲することが容易かということも感じてほしいですね。

そして、あの9.11という事件は何だったのか。それをもう一度考えるための材料になれば嬉しいと思います」

物事を見るとき視点の重要性だと語るレンジ監督。

「世界を単純化して見るのではなく、別な次元から見ることも大切ではないでしょうか。ブッシュ政権をそうしたオルタナティブな視点で探求することは必要ですから」

『大統領暗殺』。この刺激的なタイトルを持つ映画の役割は、権力やメディアから与えられた視点だけではなく、自分の視点を持つことの大切さに気づかせてくれることなのかもしれない。

Text by : 植田マサユキ

another eye

大統領暗殺
Death of a President

